

人々の笑顔があふれる「地域づくり」を応援する

地域づくり in ほくりく

2020 SUMMER



夏の尾瀬

ニッコウキスゲの咲く季節を迎えた尾瀬沼。多くのハイカーに愛される。

写真 和田 日朗

◆ 第8回定時総会開催報告

2

◆ 随想

4

北浦 勝(金沢大学名誉教授)
辰巳用水とまちづくり

◆ 特別企画

6

教訓を未来につなぐ 3.11伝承ロード
山崎 麻里子((一財)3.11伝承ロード推進機構)

◆ 特集「地域とともに」1

10

若い世代が活動して育てる田舎
-金山YARCヴィレッジプロジェクト-
(一社)金山里山の会

◆ 特集「地域とともに」2

15

花街の継承に関する多様な組織の
連携状況と活動実態 -北陸地域を対象として-
岡崎 篤行(新潟大学工学部教授)

◆ 会員だより

21

◆ 伝言板

24

第8回定時総会開催報告

去る6月18日、第8回定時総会をANAクラウンプラザホテル新潟において開催しました。

まず、出席会員数報告で、会員716名中、576名(委任状提出者563名含む)の出席が確認されました。新人会員は16名です。



理事長挨拶

(一社)北陸地域づくり協会の第8回定時総会の開催にあたり、ご挨拶を申し上げます。会員の皆様には、日頃から当協会の運営に対し多大なご支援とご協力を賜り、心より感謝を申し上げます。

これまで定時総会には大変多くの皆様よりご出席頂いておりますが、今回は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から大幅に縮小しての開催とさせて頂きました。皆様からは「年に一度、他の会員に会える楽しみな機会でもあり非常に残念」とのお話も頂戴するなど、大変心苦しく思っておりますが、ご理解賜りたく宜しくお願い申し上げます。

協会としては、この1年間

- 防災エキスパートをはじめとした、大規模かつ広域的な災害への備え
- 本格的なメンテナンス時代への対応
- i-Construction、新技術の活用など、生産性向上の取り組み
- 公益事業による、産官学、地域団体との連携推進

の4つを柱として位置付け取り組んで参りました。

昨年も、豪雨や地震が多発し、全国各地で大きな被害が発生しました。

北陸地域においても、10月には台風19号による大規模浸水災害が千曲川流域で発生し、その際には、防災エキスパートの派遣要請を受け、長野県内にとどまらず他県からも出動いただくなど、広域的かつ長期間での災害支援となりました。この活動に対し2月に北陸地方整備局長から、出動いただいたエキスパート個人と協会は「災害対応功労者感謝状」を拝領し、また協会は、新たに創設された「災害対策関係功労者表彰」も受賞となりました。これもひとえに会員各位のご協力があったのもので、改めて御礼を申し上げます。

今回の千曲川関連の災害については、その記録・記憶を後世に伝えることが重要と認識しており、思いを同じにする長野県内の大学や団体等が取り組む「千曲川災害アーカイブに関する研究」の支援を、国土の利用・整備・保全に関する資料等収集整理事業として着手することと致しました。



挨拶する近藤理事長

さて、協会の運営は、職員の努力によって業績を改善しつつあります。

当面は、新型コロナウイルス感染症対策として「新しい生活様式」での業務執行が求められる状況ですが、先が見えない状況において働き方を変える必要性を感じています。生産性を向上させつつも労働意欲が高められるよう、引き続き環境整備に取り組むこととしております。

一般社団法人に移行し8年が経過しました。安全安心の重要性を益々感じる昨今ですが、協

会が持つ有形・無形の財産、特に北陸建設振興会議を通じた技術の伝承と会員相互の交流を今後も継続・発展させ、地域づくり協会の名にふさわしい法人として歩んで参りたいと存じますので、引き続き会員の皆様のご支援とご協力をお願いし、開会のご挨拶といたします。

議事

続いて、祝電披露の後、高島専務理事から令和元年度事業報告及び公益目的支出計画実施報告があり、第1号議案「令和元年度決算承認の件」が審議され、異議なく承認されました。

さらに、第2号議案「役員選任の件」が審議され、事務局案どおり異議なく承認されました。

その後、事務局からその他参考資料として、「令和2年度事業計画」、「令和2年度収支予算書」

並びに「協会のあり方と資産の活用」を報告しました。

最後に、第9回定時総会を令和3年6月17日(木)に開催することを確認し、総会を終了しました。

引き続き、新しい役員での理事会が開催され、下表の体制が発表されました。

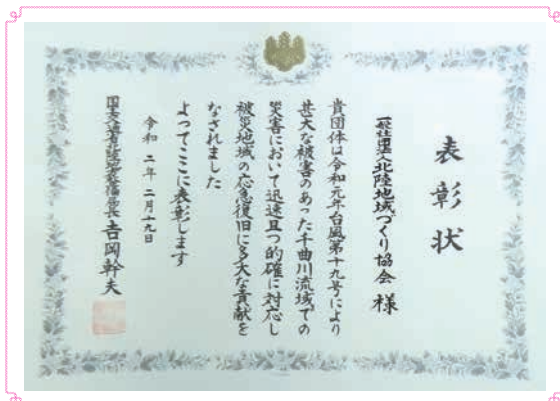
役員と体制

理事長	近藤 淳	(再任・常勤)
専務理事	高島 和夫	(再任・常勤)
理事	加藤 昭悦	(再任・非常勤)
	柴山 圭一	(再任・非常勤)
	鈴木 聖二	(新任・非常勤)
	本田 信男	(再任・非常勤)
監事	八田 守	(再任・非常勤)
	丸山 暉彦	(再任・非常勤)

北陸地方整備局から「災害対応功労者感謝状」及び「災害対策関係功労者表彰状」を授与されました

令和元年10月の東日本台風(台風19号)による千曲川災害等における北陸地方防災エキスパートの方々と当協会の災害対応・支援が表彰されました。

令和2年2月19日は北陸地方整備局で、翌20日には長野市内で表彰式が行われ、出動したエキスパートに感謝状が授与されました。



辰巳用水とまちづくり



きたうら まさる
北浦 勝

金沢大学名誉教授

金沢大学工学部教授、同大学留学生センター長を経て、2009年4月から現職。2012年公益社団法人金沢職人大学校長・学校長（2019年まで）。地震防災や辰巳用水に関する論文多数。2015年にNPO法人辰巳用水にまなぶ会（代表者 玉井信行東大名誉教授）を設立。2020年4月に同会から「城下町金沢の遺産 辰巳用水を守る」を発行。

■辰巳用水の造られるまで

金沢城は犀川と浅野川の間こたつのに挟まれた小立野台地の先端にあったので、飲料水は城内の井戸水に頼っていた。1631（寛永8）年4月に発生した大火が城下を焼き、城まで類焼させた。三代藩主前田利常が徳川幕府に無断で、城の焼失部分を修築しようとして、幕府から謀反の嫌疑をかけられた。外様大名であったが故に、常に警戒されていたのである。

当時の水事情では大火に手も足も出なかった。台地上には川がなく、城内は近くの犀川より30m以上も高い。そこで1632（寛永9）年、利常は小松の住人板屋兵四郎に水が城内へ自然に入る用水の建設を命じた。彼は犀川を徒歩で遡上し、河岸段丘の勾配を参考にしながら、用水の勾配を決めようとした、かもしれない。その頃、家づくりのための高さや長さを測る道具や水盛り器（水を入れ、水平な面を得る細長い器）はあったが、地図測量に用いることのできる高低差を測る器械はないし、文献もない。とにかく隠密に幕府に露見しないようにして、一年中、適切な水量を取得できる取入口を見つけた。それは犀川の上流、城から南東の方角（辰巳の方角）約10.6kmの地点にあった。一方、取出口付近の城と現在の兼六園との間には堀があった。兼六園の標高が城より高いので、堀を横断する堤の上を木管（のちには石管）を通して、逆サイフォンで送水した。当時としては規模が大きい逆サイフォンの難工事であった。こうして辰巳用水は9ヶ月の短い期間で三の丸まで揚水され、最終目的地である二の丸まで揚水されたのは1634（寛永11）年であった（図1）。

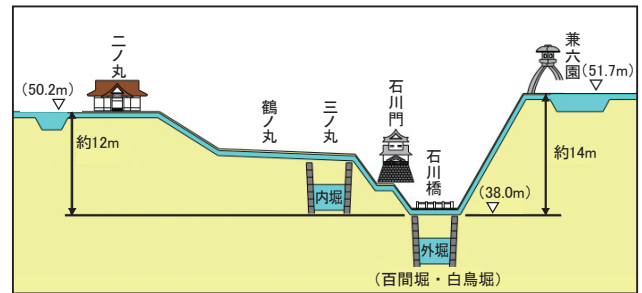


図1 逆サイフォンの概念図
（水は兼六園から二の丸御殿へ送られる）

■辰巳用水完成前後のまちづくり

辰巳用水は兼六園の泉水に給水された。またさりげなく城下の東西内外の4つの惣構堀に、また涌波、三口などの農業用水に分水された。こうして城としての防備は格段に高まった。

一方この前後から金沢では積極的なまちづくりが行われ、加賀・能登・越中の三国を合わせた加賀百万石の文化の薫り高い城下町が築かれていった。伝統文化を生み育んだ大きな理由は、幕府に睨まれないように、百万石の経済力を武力でなく文化の振興に用いたからである。幕府が能楽を奨励すると、藩主も能楽に親しみ、手厚く保護するなど、無用な争いを避け、世の中を賢く立ち回った。また歴代藩主はもとより武士や職人、商人まで茶の湯に親しんだ。茶席で重要な役割を果たす掛け軸やお菓子、茶器や茶道具、懐石料理のほか、文化学問を重んじ、加賀友禅、九谷焼、金沢漆器、金箔、邦楽、舞踊など、多彩な伝統工芸を形成していった。

■近代から現代へ

幸いにもまちをひっくり返すような大きな自然災害や戦火に見舞われることがなかったの

で、城の一部や兼六園、そして寺院群や茶屋街、町家、用水網など、歴史的な建造物やまちなみが残った。

その後辰巳用水は農業用水としての役割が減り、今は他の用水に水を配りながらまち全体の潤いや賑わいの舞台を作り出すなど、まちの環境を整える水源として、地道に重要な貢献をしている（図2）。2010（平成22）年には、江戸時代の土木技術を知る上で貴重であることから、上流部、中流部を中心とした延長約8.7kmが国史跡として指定される。2018（平成30）年、小立野台地系を巧みに利用した、城内外を潤す用水であるとして土木学会選奨土木遺産に認定されている。



図2 まちなかにも広がる辰巳用水網

石川県庁や金沢大学が中心街から、郊外へ出たこともまちの古きよきものを残し、新しいまちづくりをするのに好都合であった。県庁跡地は「いしかわ四高記念公園」となり、金沢大学の存在した城址では本物志向で史実性の高い整備が継続中である。金沢は絶えず文化に基を置きつつ、新しいものと古いものの調和を図っているように見える。金沢市は文化を残す職人の育成にも気を遣い、例えば衣食住の住に関する職人については、（公社）金沢職人大学校を設けている。同校には石工、瓦、左官、造園、大工、畳、建具、板金、表具の9科がある。プロの職人に伝統的な匠の技を伝授するところで、授業料は無料。3年間、彼らは仕事が終わってから週に一回夜に、あるいは土日に家庭生活を犠牲にして勉強に励む。昔の職人の技術だけでなく心も磨くために、お茶や謡の基本も学ぶ。これらには当時の市長の英断と応援し続けている市

民の英知が大きく関わっている。また歴史、文化、伝統の継承において県と金沢市は同じ方向で努力してきた。これらの背景が「国立工芸館」を金沢へ移転させることに繋がった。コロナウイルスの影響で遅れていたが、2020（令和2）年10月24日開館予定である。

■辰巳用水による地域の活性化に向けて

アフガニスタンで凶弾に倒れた中村哲医師は干ばつ地域に灌漑用水路を造り、砂漠に緑地を回復させ、農民の暮らしを変えた。秘密保持のために殺されたのではないかとの憶測を呼んでいる板屋兵四郎は辰巳用水を造り、まちに潤いを持たせ、多くの人が憧れるまちの基盤を造った。（写真1）



写真1 辰巳用水 緑のトンネルを行く

2015（平成27）年に北陸新幹線が金沢まで開通するまでは、ストロー現象で人も企業も東京に吸われると恐れるむきがあったが最低限ですみ、逆に本物の古きよき文化の残っている金沢へ、内外の人々の足が向かっている。まなぶ会は建設当初の用水の姿と逆サイフォンの規模を辰巳用水散策情報としてスマートフォンの画面に甦らせ、用水による地域の活性化に貢献したいと、アプリを製作中である。

コロナウイルス対策でテレワークの導入が叫ばれる今日、改めて地方での生活に関心が高まっている。家賃が高くて狭い都心の生活者から、やすらぎを覚え、文化の豊かさを感じられる金沢の暮らしが選ばれるように、これからも進化あるのみである。

本文を表すに当たり、北陸地域づくり協会にお世話になった。記して感謝する次第である。

※本文の図・写真は辰巳用水にまなぶ会提供

教訓を未来につなぐ 3.11 伝承ロード

一般財団法人 3.11 伝承ロード推進機構
山崎 麻里子

■ 広がる震災伝承の取り組み

2011年3月11日に発生した東日本大震災は東日本の太平洋沿岸500kmにも及ぶ広範囲に甚大な被害をもたらしました。この震災における伝承の必要性は発災2か月後の「復興構想7原則」（東日本大震災復興構想会議）でも指摘されました。また様々な主体による伝承の取り組みも徐々に広がりを見せました。一方、被災地が一体となった取り組みについては2018年7月に設立された「震災伝承ネットワーク協議会」（東北地方整備局、青森県、岩手県、宮城県、福島県および仙台市により構成）が打ち出した「3.11 伝承ロード」構想でようやく動き出しました。震災遺構や伝承施設をネットワーク化する構想で、この具体化に向けて同協議会が設けた「震災伝承検討会」において、産学官民が連携した推進体制を早急に構築すべきとの提言がとりまとめられました。

そして2019年8月1日に民間主導による産学官民が連携した「一般財団法人 3.11 伝承ロード推進機構（以下、伝承機構）」が設立されました。この伝承機構は東日本大震災の実情や教訓を後世に伝承するため、被災地に多くある震災伝承施設を案内し、防災力の向上と地域の活性化を目指しています。

■ 教訓を学べる震災伝承施設の情報発信

東北の各地には、東日本大震災の教訓を後世に伝承するため、多くの石碑や遺構、伝承施設が整備されました。このほかにも明治三陸地震津波、昭和三陸地震津波などの石碑や慰霊碑も残されています。「震災伝承ネットワーク協議会」では、これらの遺構や施設を「震災伝承施設」として募集し、236件（2020年6月9日現在）が登録されています。

伝承機構では、国内外の多くの方にこれらの施設と地域をめぐり、学びの場として活用し

ていただくため、ホームページでの情報発信と「3.11 伝承ロード」MAPを作成し、各種施設に配布しています。今後はインバウンド向けに英語版の作成や、東北地域の魅力とともに発信するイラストマップの作成も進める予定にしています。

■ 伝承ツーリズム

伝承機構では、「防災」や「復旧・復興」「生業再生・まちづくり」「災害とインフラ整備」など、ニーズに合わせた研修会の企画提案もしています。

伝承機構が企画した第1号の「3.11 伝承ロード研修会」は、建設業関係者を対象として、2019年11月に2回開催しました。震災伝承施設の見学、語り部による遺構の案内と講話、津波による被害を乗り越え営業再開を果たした「宝来館」（釜石市）に宿泊する、1泊2日のコースで実施し、関東や北陸方面からの参加者も多く、合計70名の方からご参加いただきました。

アンケートでは「防災に対する力強いメッセージが伝わってきた」「過去を見つめることが未来につながる」「コースや語り部の全てに感動した」といった感想とともに、「語り部さんの話をもっと聞きたかった」といった声も寄せられました。



研修会の様子（東日本大震災津波伝承館）

実際に参加された方の感想やご意見、また研修会を希望される方のニーズに合わせて、今後も旅行会社と提携を図りながら研修企画を提案し、関係企業・団体や自治体職員の研修、大学・学校における教育旅行等でも活用いただけるよう、プログラムの構築を進めているところです。

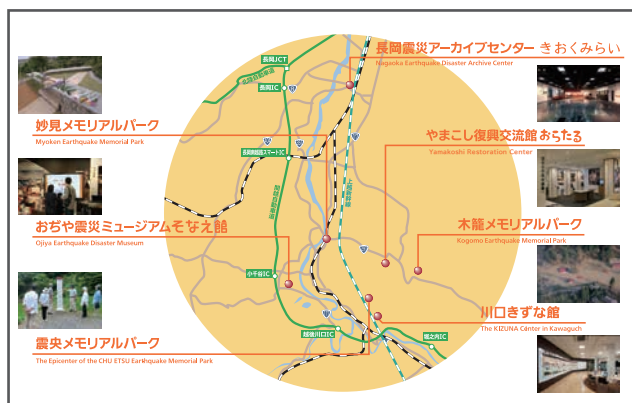
■ 全国の災害を伝える取り組み

伝承機構では「3.11 伝承ロード」の構想のもと、前述のような取り組みを進めています。一方全国でも、種々の自然災害を経験したことで得た知見・教訓、その後の復興に向けた地域づくりの歩みを記録に残し、伝えるための取り組みが行われています。ここからはその一部をご紹介します。

【中越メモリアル回廊】

2004年に発生した新潟県中越地震の被災地に整備された「中越メモリアル回廊」は4つの施設と3つのメモリアルパークが整備されました。

施設ではそれぞれ、災害への備え、山の暮らしの再生、地域経営、人と人との絆、アーカイブや研究といったテーマの異なる展示となっているため、来訪者から複数の施設や地域を訪れてもらう仕組みとなっています。



中越メモリアル回廊

「中越まるごとアーカイブ」として、整備された施設やメモリアルパークだけでなく、それらが立地する被災した地域全体で中越地震を伝えていく取り組みが行われました。過疎化、高齢化の進む中山間地域で大きな被害をもたらした震災ですが、この震災をきっかけに、地域の持続可能性をもう一度考え直すきっかけにもなっています。中越メモリアル回廊の各施設では、地域の暮らしに様々な影響ときっかけを与

えた震災として、震災前、直後、そして現在にいたるまでの地域の歴史、復興の歩みとともに伝え続けています。

【兵庫県丹波市】

兵庫県丹波市では2014年に土砂災害が発生しました。この土砂災害を受け丹波市では「復興には女性たちの力が欠かせない」という視点も持って復旧・復興に取り組んできました。

中越地震で被災した旧山古志村の復興をモデルにした丹波市では、復興支援活動の1つとして「丹波復興女性プロジェクト会ほんぽ好」の活動が始まり、定期的に地元の食材を使ったランチの提供をしています。また、地域の生業である林業を生かした体験プログラムや、被災地をフィールドとしたスタディツアーの開催など、精力的に取り組んでいます。また、丹波市に限らず、中越地震、熊本地震、東日本大震災の被災地から災害伝承や被災地復興、地域づくりに取り組む住民を招きシンポジウムを開催するなど、被災地間交流のきっかけとなる貴重な機会を創出してきました。



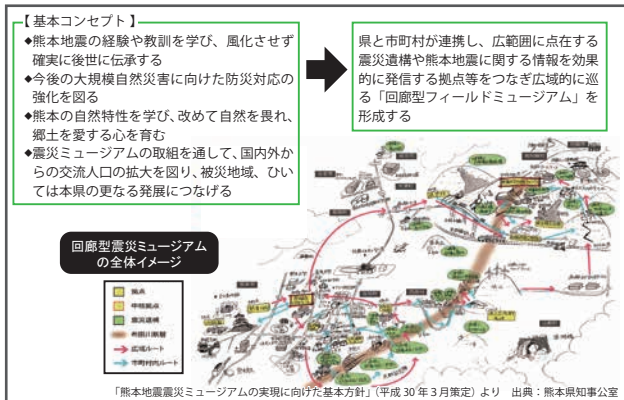
丹波復興女性プロジェクト会ほんぽ好

【熊本地震震災ミュージアム】

2016年に発生した熊本地震の経験や教訓を学び、風化させずに後世に伝承するために、「熊本地震震災ミュージアム」の整備も進んでいます。熊本県が中心となり、被災した地域の自治体が連携して、震災遺構や拠点をつなぐ「回廊型フィールドミュージアム」が形成されました。

これにより、自然災害に対する防災力を高めるだけでなく、熊本の自然特性を学び、地域を愛する心をはぐくむ、そして、本来持つ観光の力と組み合わせ交流人口の拡大を図り、被災地と熊本県の発展につなげようというものです。

熊本県出身の漫画家尾田栄一郎氏の作品で、世界的にも人気を博している漫画「ワンピース」とコラボした広報戦略や、各地に残る断層を残すことで地球のダイナミックな営みを伝える震災遺構の整備など、様々な分野の来訪者から興味関心を持ってもらえるような情報発信、展示手法を取り入れています。



熊本地震震災ミュージアム「記憶の廻廊」

ここで紹介した3つの事例は、いずれも「災害」の事実とそこから得られた学びを伝えるとともに、地域の文化や歴史、被災後の地域の歩み、地域づくりの様子も含めて伝えています。自然災害の事実だけでなく、その地域の歴史や、被災の状況、そしてその災害にどう向き合い、今日までどのように日々の営みを続けてきたのか、これらを丸ごと伝えていくことも災害を伝えることであり、災害を風化させない1つの方法なのではないでしょうか。

■東北の震災伝承

まもなく東日本大震災から10年をむかえます。東北でも多くの震災伝承施設が整備され、各地で貴重な教訓の伝承が行われています。

【命を守るために】

岩手県釜石市鵜住居地区に整備された「いのちをつなぐ未来館」では、3.11当時の様子や施設のある鵜住居地区で何が起きたのか、その日の出来事を伝えています。そして、その経験や教訓を活かし、来館者に防災の知識を学んでもらうための展示とプログラムが提供されています。

鵜住居地区では、震災前から続けられてきた防災教育により、子どもたちと近隣住民の命が救われた出来事と、本来は津波避難場所ではな

いところに避難してしまったことで多くの市民が犠牲となる出来事が起きています。未来館の展示では、この2つの出来事を伝え、見学する方に対して自分自身の命を守るためにどう行動したらいいのかを問いかけ、伝えています。



いのちをつなぐ未来館

【語り部と震災遺構】

「震災遺構」という形で伝承する取り組みも進んでいます。

宮城県石巻市立大川小学校では、児童、教職員合わせて84人(行方不明含む)が犠牲となりました。震災後、「大川伝承の会」(遺族や住民による語り部ガイド)の取り組みが始まり、「なぜ、子どもたちの命が奪われたのか」「助かる方法はなかったのか」「あの日、ここで何が起きたのか」を多くの人に知ってほしいという思いから活動を続けています。



震災遺構として残された旧大川小学校

石巻市はここを「震災遺構」として残すこととし、周辺には公園や駐車場の整備が進められています。今でも多くの方が立ち寄り、手を合わせ、花束が手向けられています。

宮城県南三陸町には震災遺構「高野会館」も残されています。これは地元の観光ホテル「南三陸ホテル観洋」を運営する阿部長商店の持ち物で、民間の震災遺構となっています。

当時ここでは、高齢者の方が集まり、芸能発表会が行われていました。施設担当者や利用者

の判断で、数キロ離れた指定避難所への避難ではなく、5階建ての建物最上階への避難を決断し、327名と犬2匹の命が助かった場所でもあります。多くが自治体が残す震災遺構である中、民間の保有する震災遺構の1つとして、また、多くの学びを得られる貴重な遺構として、現地を訪れる方の記憶に残る施設となっています。



4階まで津波に襲われた「高野会館」

遺構はそれ自体が津波の威力を物語り、訪れる方に様々な気付きを与えてくれます。これまでは気づかなかった海との距離感、津波の襲ってきた高さだけでなく、その場所で確かに人々の暮らしがあったこと、そこで暮らした人々の歴史や思い出があることを、“その場所”に生々しく残し、伝えてくれます。

【市民団体の動き】

震災伝承の施設がなくても自分たちが体験したこと、学んだことを多くの市民に伝え、次の災害に備えるために少しでも役に立つ知識を身につけてもらおうと、防災教育の市民活動続ける団体も立ち上がりました。

宮城県名取市閑上地区では、防災教育の市民団体「ゆりあげかもめ」が、県・市、公民館や企業の要請を受け、「パッキング」やティッシュペーパーとアルミホイルで作るランプ（「ほのぼの灯り」）や、それらを空き缶と組み合わせて作る「空き缶コンロ」の作り方など、災害時に使える具体的な技術を、市民が市民へ伝える活動を続けています。

この他にも、福島県双葉郡では、「双葉郡市民会議（市民活動団体）」が双葉郡の8町村の情報発信と住民の交流スペースの運営、双葉郡を訪れる方のインフォメーションセンターとしての役割を担う活動をしています。



「ゆりあげかもめ」による市民防災講座の様子

語り継ぐ

東日本大震災の被災地は複数の自治体を含み広域にわたるため、設置者の違う震災伝承施設が数多く整備され、各地に点在する施設がそれぞれ懸命に活動を続けています。

震災から間もなく10年をむかえます。再び注目が集まる一方で、「10年ひとくぎり」としてその後は関心が薄れてしまうことも懸念されます。

私たちは、貴重な教訓を有する震災伝承施設を中心に、教訓を伝えようとする語り部、三陸の美しい自然、東北の文化、海とともに生きる逞しくも温かい住民、これらをつなぎ一体となって国内外に発信することで、東北で学び、地域をめぐる人の流れを生み出す取り組みを進めたいと思います。



3.11 伝承ロード研修会

◆山崎 麻里子氏略歴

やまざき まりこ
新潟県長岡市出身。社団法人北陸建設弘済会（現北陸地域づくり協会）、NPO法人中越防災フロンティアを経て、2010年より公益社団法人中越防災安全推進機構。中越地震の震災伝承、復興に向けた地域づくりを支援する「中越メモリアル回廊」の拠点施設「長岡震災アーカイブセンターきおくみらい」の整備・運営に携わる。神戸、東日本、熊本、丹波など様々な自然災害を経験した地域と連携を図りながら地域づくり活動に携わる。2019年より一般財団法人3.11伝承ロード推進機構にて、東北の震災伝承に取り組む。

特集「地域とともに」

「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業

(一社)北陸地域づくり協会は、公益事業として、地域活性化の成果が期待できる事業を募集・採択・支援する「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業を実施しています。
今回は、第24回事業で支援した事業、2件の活動を紹介します。

若い世代が活動して育てる田舎 –金山YARCヴィレッジプロジェクト–

一般社団法人 金山里山の会



金山里山の景色



「親子体験会」で森林の役割、里山の魅力を学ぶ子供たち



位置図

1. はじめに

射水市は富山新港が立地する海岸部から下条川に沿う低平地の水田地帯を経て南部丘陵に連なる地域であり、面積10,918ha、人口92,456人を擁する。射水市の森林率は11% (1,187ha) であり県平均の67%から見ると少ないものの、射水市の森林は里や海に非常に近く射水の豊かな農地と川や海を守る大きな役割を担ってきた。丘陵の麓には現在も40余りの農業用ため池と農地が広がり、6月には周辺にホテルが飛び交う。ため池の一つ「石畑池」には毎年冬に白鳥が飛来し、小学校の故郷学習も行われている。

射水市の森林の97% (1,153ha) は標高100m未満、83%は傾斜30度未満の土地に広がっている。標高が低く斜面の勾配が緩いため、人が入りやすいことが特徴である。市街地・集落周辺の丘陵地では多くの遺跡が発掘されており、古くから豊かな自然の中で人々の暮らしが営ま

れていたことがうかがえる。樹木の燃料としての利用も約3500年前に始まり、20～30年に1回伐採が行われ、常に新しい涵養林が保たれて、人と自然が共生する豊かな里山が維持されてきた。

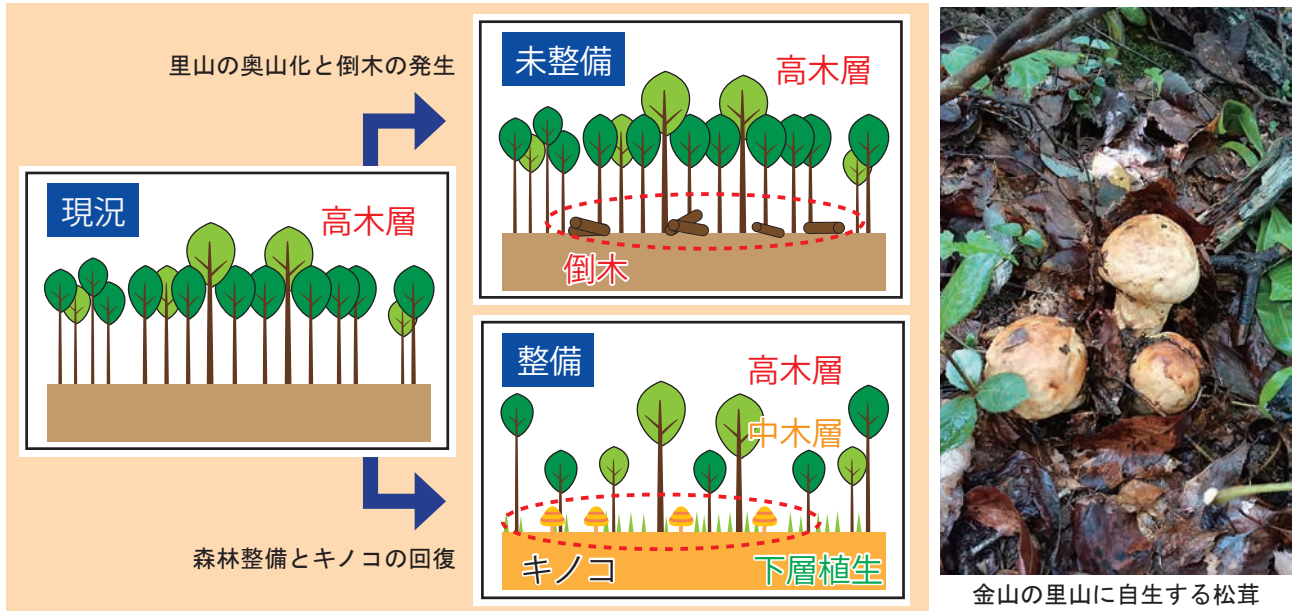
しかし昭和の30年代頃からのライフスタイルの変化によって森林利用は大きく減少した。南部丘陵地でも森の手入れが行われないまま約50年の歳月が経過。高木が生い茂り光も風も入らない奥山化が進行し、豪雨災害の要因となる倒木の発生も懸念される状況となった。生態系も変化し、猪による獣害が増える一方でウサギは減少して、マツタケをはじめとするキノコはほとんど採れなくなった。同時に麓の集落から便利な街へと人が流出し高齢化が進み、里山の利用と整備の担い手も減少した。

こうした状況を受けて南部丘陵地の地元地域である金山地区では、かつての豊かな涵養林の里山を再生するために、まずは地元の住民が活動しようと、2011年3月に「金山里山の会」を

結成した。里山に人が入る事により高木・中木・草地という多様な林相が生じて倒木は無くなりキノコも出る。地下に雨水が浸透する豊かな涵養林となることも期待できる。

60代が中心となり、将来に向けて30代から50代にも呼びかけて約20名でのスタートであった。現在では会員数47名となり、50代以

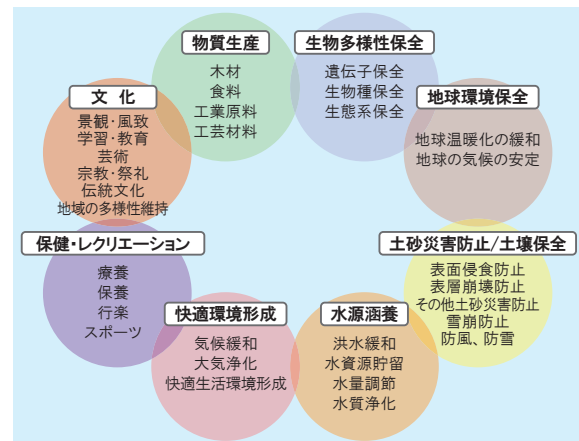
下が約40%と若手の会員も増えている。活動が定着したのを契機に発足から5年後の2016年には法人化して組織体制の確立も図った。プロジェクトチームとして研究部会・生産部会・体験交流部会が発足するなど組織も充実し、活動も多角化している。本年度の事業ではこれら3つの部会の活動の一層の拡充を図った。



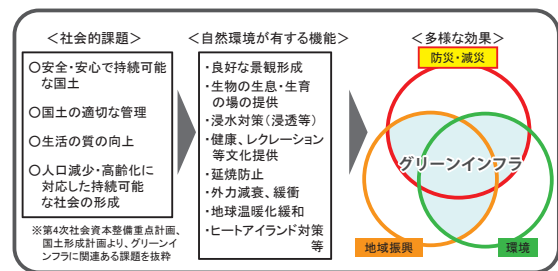
2. 事業の背景と目的

「金山里山の会」では国土の適切な管理のために樹木を伐採し水源涵養を図る活動を“水と緑に輝く里山プロジェクト”というスローガンの下で展開している。それは単に伐採を行うだけではなく、薪等のエネルギー利用やシイタケの原木利用を行い、樹木の萌芽を促進する循環型方式を志向したものである。本事業では会の活動の拡充と持続性向上を図るため、保水力が豊かで地域の水循環に役立つ健全な涵養林をつくるとともに、文化の醸成や健康増進、森の恵みが得られる機能の高い里山のグリーンインフラをつくることを目的とした。

具体的には森林整備活動の充実による防災・減災力の向上のほか、教育や健康増進の面での森林利用の促進、若い世代が里山の良さを体験し里山での交流人口を増やす事で若者が住みたくなるフィールド作りを目指した。若者から子供も含めて活動するフィールドづくりは移住定住しやすい地区となる。



森林の有する多面的機能 (出典: 林野庁)



○防災・減災や地域振興、生物生息空間の提供への貢献等、地域課題への対応

○持続可能な社会、自然共生社会、国土の適切な管理、質の高いインフラ投資への貢献

グリーンインフラ (出典: 国土交通省)

3. 事業内容

■活動1 森林整備

森林整備を生活の中に組み込み、生産活動を地域の防災力向上につなげることを目的として、薪ストーブ仲間の「薪焚人の会」や、薪や原木椎茸栽培の生産を目指す「こならの会」を結成した。知って考える楽しみ、発見の楽しみが活動を継続させる力につながると考えており、活動にあたっては、研究を重ね、単なる森林管理の作業に終わらないように気をつけている。本事業でも森林整備や松茸等の自生する茸再生については、富山県森林研究所の専門研究員にアドバイスを受けながら取り組んだ。

富山県立大学の星川 圭介准教授（金山里山の会会員）は、樹木伐採を行った林床環境を様々な林相を持つ林分において含水率と地温の観測を実施し、間伐や下草刈りを行った林分では特に夏季において皆伐や未伐採の林分と比べて含水率が保たれることを明らかにした。キノコの菌が繁殖するため間伐が好適な環境を作り出すことを示唆する結果である。ため池などの涵養機能も高めるものと考えられる。



こならの会による森林整備

■活動2 健康のための森林利用の促進

ジョギングや自転車での森林を利用する新スポーツで健康増進を図りつつ、持続可能な林道管理を目指しており、本事業の中ではスポーツ利用面での林道の評価を行った。

グループによる林道コースを試走した結果、トレイルランにおける評価は低いものの快適性や走り易さで評価を得た。

具体的な感想は下記の通りである。

- ・森林整備された広葉樹の明るい林内を走れて気持ちがいい。
- ・起伏がきつすぎず緩すぎずアップダウンが少なく丁度よく走り易く長距離におススメ。
- ・トレイルランと言うよりもクロスカントリーコースの感じ。
- ・靴の裏に粘土質の泥が異常に付く為、ウッドチップ等による改良が必要。

このほか、平坦な地域が多い射水市内の中で上り坂のトレーニングができるジョギングコースとして貴重であるとの意見も寄せられた。

■活動3 学習・教育のための体験交流会

里山の教育利用の取り組みとして、児童、小学校、企業、大学を対象とした里山体験会を実施した。

①児童との体験学習会

富山県立大学と共同で里山の中をクイズラリー形式で探検する「里山体験会」を企画・実施した。富山県立大学の学生2名が「いみず学生アイデアコンテスト」(H31.2.2)で「南部丘陵地の自然を活かした教育・運動公園」という提案を行い、最優秀賞を受賞しており、本企画はその提案に基づくものである。射水市内から広く参加を募るため、チラシ500部を印刷し市内各所のコミュニティーセンターや図書館、引きこもり児童支援施設などを通じて配布を行った。実施後に行った参加者保護者対象のアンケートでは、「一人では森に入れない。楽しかったので今後も参加したい」という感想が寄せられた。

また単独の企画に加え、射水市の「射水まちづくりプラットフォーム」が7月29日に主催した「第1回 NPOの活動をみてみよう～里山の生き物を育て、自然を守るNPO活動を親子で体験～」の参加者を受け入れ、里山体験を提供した。



富山県立大学生のアイデアを実践した「里山体験会」

②小学校の故郷学習支援

地元の金山小学校とは、3年生との木の枝鉛筆づくりから、5・6年生との里山勉強と椎茸原木菌入れや学校田の藁を利用した“しめ飾り”づくりを実施し、故郷学習の支援を行った。

③企業との交流会

故郷体験として春のホタルの時期と秋のキノコの時期の2回交流会を実施した。

春は薪づくりやチップ作業体験により循環型の仕組みや作業用林道の遊歩道体験やホタルを観賞し、秋には木こり体験も含めグリーンツーリズム企画の是非等の意見交換を実施した。



企業（TOTO（株））交流会

④大学との交流会

射水市のアイデアコンテストで最優秀賞を受賞した星川ゼミ生、研究室生と共に、木こり体験や林道の草刈りの体験を実施した。本活動は北日本新聞と富山新聞に大きく掲載され、地域で大きな反響を得た。

■活動4 地域の文化祭への出展と

里山ワークショップ

金山里山の会の活動に対する地元地域での認知度拡大のため、10月20日に行われた「金山文化祭」に会の活動を紹介するパネル等を出展するとともに、来場者を対象とした会の活動に関するアンケート調査を実施した。

加えて、里山の整備と利活用について地域の若い人達の意見を集約することを目的とした「里山ワークショップ」の企画と準備作業を行った。実行委員会を立ち上げて開催時期やイベントの内容を検討し、3月15日実施を目指してチラシの作成や配布などの開催準備を進めた。残念ながら新型コロナウイルスの影響により中止となったが、若者の意見による地域活性化に向けた初めての取り組みとして当地域では大きな関心を集めた。



里山ワークショップ
実行委員会の話し合いの様子



チラシ

4. 事業の成果

森林整備や森林産物の生産・流通・開発に向けた組織力が強化された。薪ストーブ利用者仲間の「薪焚人の会」が発足し、薪の自給自足により森林整備を行う体制が整った。森林整備は一人では行えないため、集団作業体制の充実がとりわけ重要である。流通面においても「こならの会」を結成し、組織力を生かして薪や椎茸原木、シイタケの生産・販売を拡大した。「こなら姫」というブランド名でのシイタケ販売は好評を得ている。また会員家庭でのシイタケ栽培も拡大した。今後の開発分野に位置づけている野草の研究と生産に向けた方向性も確立した。

非木材森林産物である天然キノコ生産の再生については、整備後の広葉樹林においてサマツタケやシヤカシメジの発生拡大が確認され、取り組みが一定の成果を収めたといえる。

文化・スポーツ目的の森林利用については、トレイルランやジョギングの場としての林道の評価を行ったことにより、林道のスポーツ利用の実現に向けた道筋を示すことができた。児童の里山体験行事を企画・運営したこと、および新型コロナウイルス流行のため中止となったもののワークショップを企画し、開催準備を進めたことにより、会の企画力やイベント実行力、組織運営力も高まった。

金山文化祭において実施したアンケート調査により地域住民の里山の会への認知度と活動に対する認識を確認することができたことも大きな成果である。アンケート調査の結果を受け、農業を中心とした「従来踏襲型」社会から農業や里山も含め、さらに若者の意見を取り入れた「多様性伝承型」社会の実現に向けて、会の活動は一步を踏み出した。

5. 今後の展開

今後は本事業で得られた成果に基づき各種事業を発展・実現させていくことに加え、里山と農地を一体的なグリーンインフラとして、より包括的な地域の活性化と地域資源の質の向上に取り組む。

森林整備については薪づくりや椎茸原木づくりを生活の中に組み込んだ持続可能な仕組みを構築し、小さな林業家を育成する。人と里山が共存し、松茸を中心とした幻のキノコやコナラ原木を活用した露地型原木椎茸栽培、山菜・野草等の里山副産物の生産によって里山に経済性を持たせる仕組みの創設も図る。これらの仕組みによってキノコや薪という森の恵みを得るといふ行為が、森を活かし、里山の美しい涵養林を形成して、ふるさと射水の農地・川・海を豊かにするという流れを確立する。

スポーツや文化面での森林の利活用も推進する。まずは次世代に向けた自然と親しむ親子活動の企画を含めた「里山楽校」を実施して子育て環境を創設する。また木こり体験等の自然体験や森林を活用した新スポーツにより、田舎と都市の交流をこれまで以上に発展させていく。そして、これらの活動によって培われた文化・教育・レクリエーションの基盤を吸引力とした若者定住を図り、若者の意見を取り入れた地域活性化を進める。

古来、農業は地域の里山と対をなす存在であったが、資源利用が変化して以降この50年ほどは農業中心の地域社会が続いた。中山間地の農業や集落が衰退に直面している現在、その在り方が限界に差し掛かっているといえる。地域住民が荒廃した里山に再び入ることにより農業と里山が一体となった多様な地域資源を形成し、その地域資源に多様な形で多様な人々が依拠する持続可能な地域社会の創成を図る。その核の一つとなるのが地域のブランディングである。

現在、原木椎茸「こなら姫」の産地としての知名度は上がりつつあるが、それに加えてサマツタケをはじめシヤカシメジ、モミタケ、アマタケといった天然キノコの産地としての地域のブランディングを図る。また食味が良いという評判を得ている地元産の米についても、UAVリモートセンシングなどによる食味の定量的評価を行いながら「里山米」として売り出し、地域の活性化につなげる計画である。

「次世代に残そう豊かな里山」「森は海の恋人」と言われている。森と海が近いこの射水でこそやり甲斐と実感のあるこれらの言葉に答えるべく、多くの人と関わりながら実践していきたい。

問い合わせ先

(一社)金山里山の会／代表理事：前川 修

富山県射水市青井谷 1776

【facebook】

<https://www.facebook.com/kanayama.satoyama/>

金山YARCヴィレッジプロジェクトの「YARC」は「Young Active Raise Country」の略です

花街の継承に関する多様な組織の連携状況と活動の実態 —北陸地域を対象として—

新潟大学工学部教授 岡崎 篤行

1. 研究の背景・目的

花街は、芸妓による舞踊や音曲などを料亭やお茶屋などで楽しめる街の一面を指す。さらに花街は、料亭建築等のハードから、伝統技芸や茶道等のソフトまで、あらゆる日本文化を包括的に継承する稀有な場である。なお、近代以降の花街(狭義)は、娼妓の遊廓とは異なる。近年、花街には商工会議所などの支援する団体が関わり、まちづくりの状況は変化している。

北陸地域には、現役の花柳界が新潟県、石川県、福井県、岐阜県に現存する。その中でも、金沢市のひがしと主計町は、重要伝統的建造物群保存地区の選定を受け、花街の町並みが評価を受けた一つである。また、これらの地区ではまちづくり協定があり、建築物の用途、高さ、形態・意匠、営業品目の規制が規定されている。金沢は茶屋街であるが、新潟市古町花街には、国の登録文化財にもなっている料亭も含め、戦前の建物が多く残る。歴史的景観が残る料亭街として全国随一の花街である。また、全国初の芸妓育成派遣会社として柳都振興株式会社が設立された。このように、北陸地域は、先進的な活動を行っている花街がある。



鍋茶屋通りと古町芸妓
(©新潟観光コンベンション協会)

そこで本研究では、花街におけるまちづくり活動に取り組み際のデータベースとするため、北陸地域に位置し活動が活発だと考えられる、古町(新潟市)、高山、ひがし(金沢市)、にし(金沢市)、主計町(金沢市)、浜町(福井市)、小浜の花街を対象に花街の維持継承・活性化に関わる組織の、1) 概要、2) 他組織との関わり、

3) 広報活動について実態を明らかにすることを目的とする。これを踏まえ、花柳界組織を中心に、関わる組織や活動の体系化を行う。

2. 調査・実施内容

北陸地域に位置する7か所の花街について、関連HPの参照、面会によるヒアリング、現地踏査を行った。また、これらの成果を一般市民及び花柳界関係者に周知するため、成果報告会として、2020年1月19日「花街・料亭の研究報告会 第一部花街の継承に関する多様な組織の連携状況と活動の実態—北陸地域を対象として—」を実施した。

調査実施日(2019年度)

市町村	花街名	所属	ヒアリング実施日	方法
新潟	古町	古町花街の会(花柳界・商店街・一般飲食・行政の関係者・専門家・住民)	月1回	古町花街の会の幹事会へ参加
高山	高山	商工会議所	11月8日	面会
		料亭 主人	11月9日	面会
金沢	ひがし	—	9月4日	現地踏査
	にし	にし茶屋街を愛する会	9月6日	面会
	主計町	主計町町会	9月6日	面会
福井	浜町	福井・浜町芸妓組合	9月5日	面会
		福井芸妓伝統育成会	9月5日	面会
小浜	小浜	芸妓	3月18日	電話



花街・料亭の研究報告会(2020/1/19)の様子

3. 花街の構成

3.1 花街・花柳界

花街は、場所を指すこととする。主に、場所を提供し板前をおく「料理屋」、場所を提供し板前をおかない「待合茶屋」、芸妓が所属する「置屋」の三業により成り立つ。これらの業界を花柳界とする。花柳界組織は、置屋が加盟する「芸妓置屋組合」、料理屋が加盟する「料理屋組合」、これらを包括した三業組合があり、地域により構成や名称が異なる。なお、本研究では花街は花柳界も含める。

3.2 茶屋型花街、料亭型花街

今回対象とした北陸地域の花街のうち、金沢三茶屋街は待合と置屋により花街が構成される茶屋型花街である。料理屋にも芸妓は派遣されるが、花街には含まれない。金沢の花街は、芸妓がお茶屋の女将、置屋のお母さんの三役を務める。それ以外の花街は、料理屋、置屋により構成される料亭型花街である。

4. 各花街の調査報告

4.1 古町（新潟市）

1) 花柳界組織の構成及び活動

芸妓 26 名が活動し、置屋が新潟芸妓置屋組合に所属する。料亭 13 軒が新潟市料理業組合に所属する。古町の置屋のうち、一軒が柳都振興株式会社という組織であり、芸妓 26 名のうち 12 名が柳都振興に所属し、通称「柳都さん」と呼ばれる。これらを包括する組織として、新潟三業協同組合がある。

新潟三業協同組合は、検番の事務所を置く元待合の建物で、2018 年より「古町柳都カフェ」という芸妓がお茶を振る舞う喫茶を運営している。

2) 支援組織の概要と活動

主に、柳都振興後援会、古町芸妓育成支援協議会、古町花街の会がある。

柳都振興後援会は、地元企業により 2000 年に結成された。柳都振興株式会社の後援会であり、営業の補填を行う。

古町芸妓育成支援協議会は、新潟三業協同組合、柳都振興後援会により 2013 年に結成さ

れた。芸妓の育成支援を目的とし、新潟市観光政策課からの補助金を受け、芸妓の支援を行う。毎年、3 月に成果発表会として「華つなぐ道」を行う。

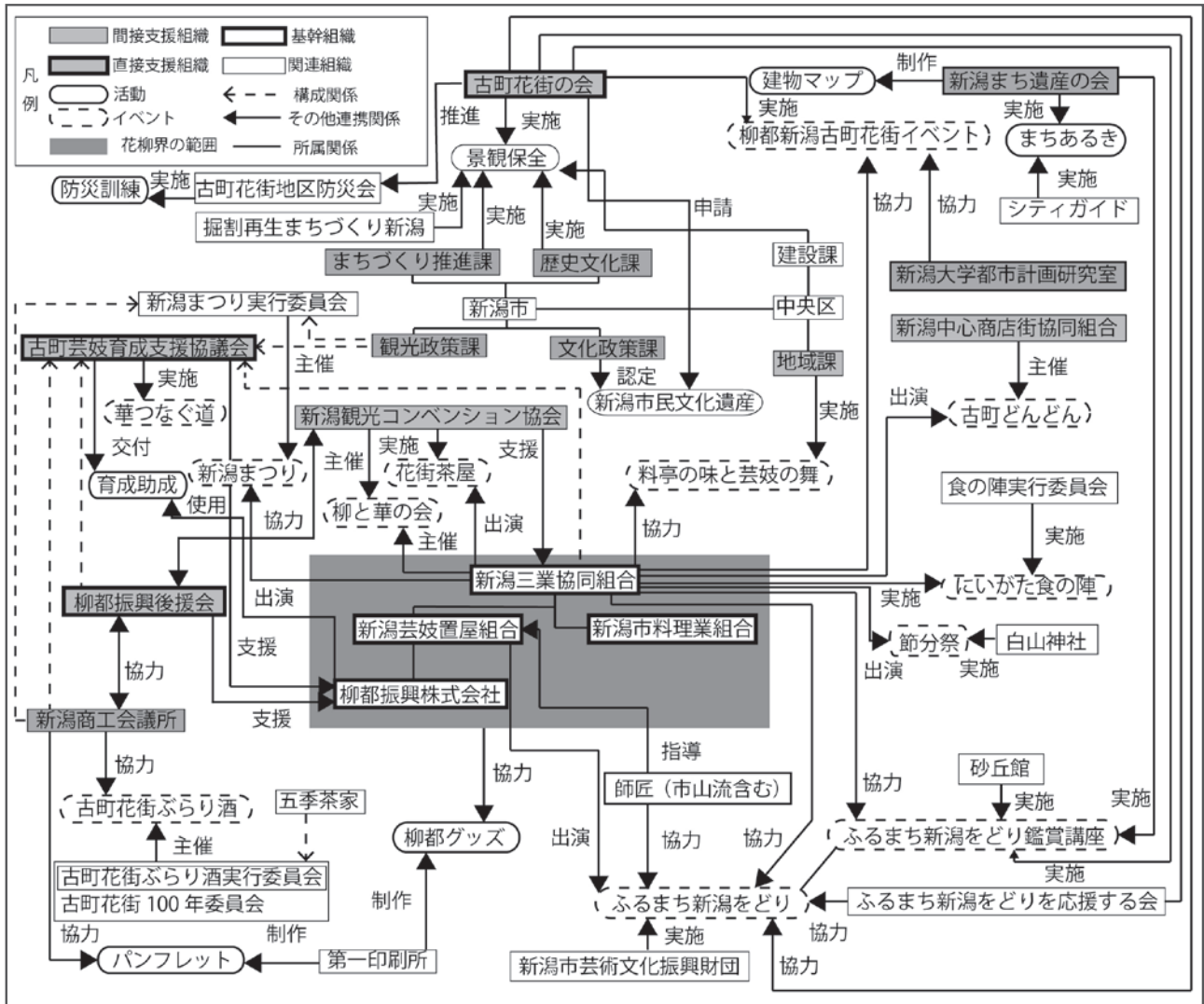
古町花街の会は、新潟市の景観形成推進組織である。住民、行政、商工会議所、専門家、花柳界、商店街、一般飲食店により、2012 年に組織された。歴史的町並みの保全、花街文化の継承・広報等の活動を行う。具体的には、町並み修景の推進や提灯による景観演出、古町芸妓総出演の舞踊公演「ふるまち新潟をどり」での呈茶席の企画、をどり観賞講座やシンポジウムの実施、花街案内板の設置、古町花街の新潟市民文化遺産への推薦等活動は多岐にわたる。



古町（新潟市）の町並み

古町（新潟市）の概要

料亭数 [軒]	13	芸妓数 [名]	26 うち柳都 12
花柳界組織	新潟芸妓置屋組合、柳都振興株式会社、新潟市料理業組合、新潟三業協同組合		
支援組織	柳都振興後援会		
中心となる構成員	地元企業		
支援内容	育成		
支援組織	古町芸妓育成支援協議会		
中心となる構成員	商工会議所、行政、観光協会、花柳界		
支援内容	育成、広報、イベント		
支援組織・構成人数	古町花街の会・130		
中心となる構成員	住民、行政、商工会議所、専門家、花柳界、商店街、一般飲食店		
支援内容	景観整備、広報		



古町（新潟市）の連携状況

4.2 高山（高山市）

1) 花柳界組織の構成及び活動

芸妓9名、料亭7軒が営業し、花柳界組織はないことが分かった。

2) 支援組織の概要と活動

商工会議所が中心に、飛騨高山おもてなし文化振興協会が2013年に結成された。振興協会の会員となっている芸妓を対象とし、育成の支援を行う。支援は1段階目（最長4年）に長唄、小唄、端唄、鳴り物、舞踊のお稽古代の支援を行い、2段階目（最長6年）に、上記5つのうち3つまでの支援を行う。他に、体験会を主催しており、舞踊披露、楽器の紹介、お稽古体験を行えるプログラムとなっていることが分かった。



料亭 洲さき（高山）

高山（高山市）の概要

料亭数 [軒]	7	芸妓数 [名]	9
花柳界組織	なし		
支援組織	飛騨高山おもてなし文化振興協会		
中心となる構成員	商工会議所		
会員数	法人79名、個人18名、芸妓9名		
支援内容	育成		

4.3 金沢三茶屋街

4.3.1 三茶屋街全体に関わる組織及び活動

公益財団法人横浜記念金沢の文化創生財団は、1991年より新人芸妓とその指導者に対し、育成支援を行う。

金沢三茶屋街全体の概要

支援組織	金沢伝統芸能振興協同組合
中心となる構成員	商工会議所、行政、企業
支援内容	育成、舞台発表、新人育成、PR
支援組織	(公財)横浜記念金沢の文化創生財団
中心となる構成員	行政、企業
支援内容	新人育成、育成者支援

金沢伝統芸能振興協同組合は、地元企業や芸妓、お茶屋経営者が加盟する組合である。三茶屋街全体に対し、補助金を出す。また、新人芸妓に対しても支援する。助成事業以外に、「お稽古風景見学会」の主催や、金沢芸妓やお茶屋、舞踊に関するHPの管理やパンフレットの制作を行う。

上記の組織以外に、県の文化振興課では「いしかわ県民文化振興基金」を設置し、芸妓に対して伝統芸能向上支援助成を行う。助成金交付以外に2013年より舞踊公演、「金沢芸妓の舞」を開催している。

4.3.2 ひがし（金沢市）

1) 花柳界組織の構成及び活動

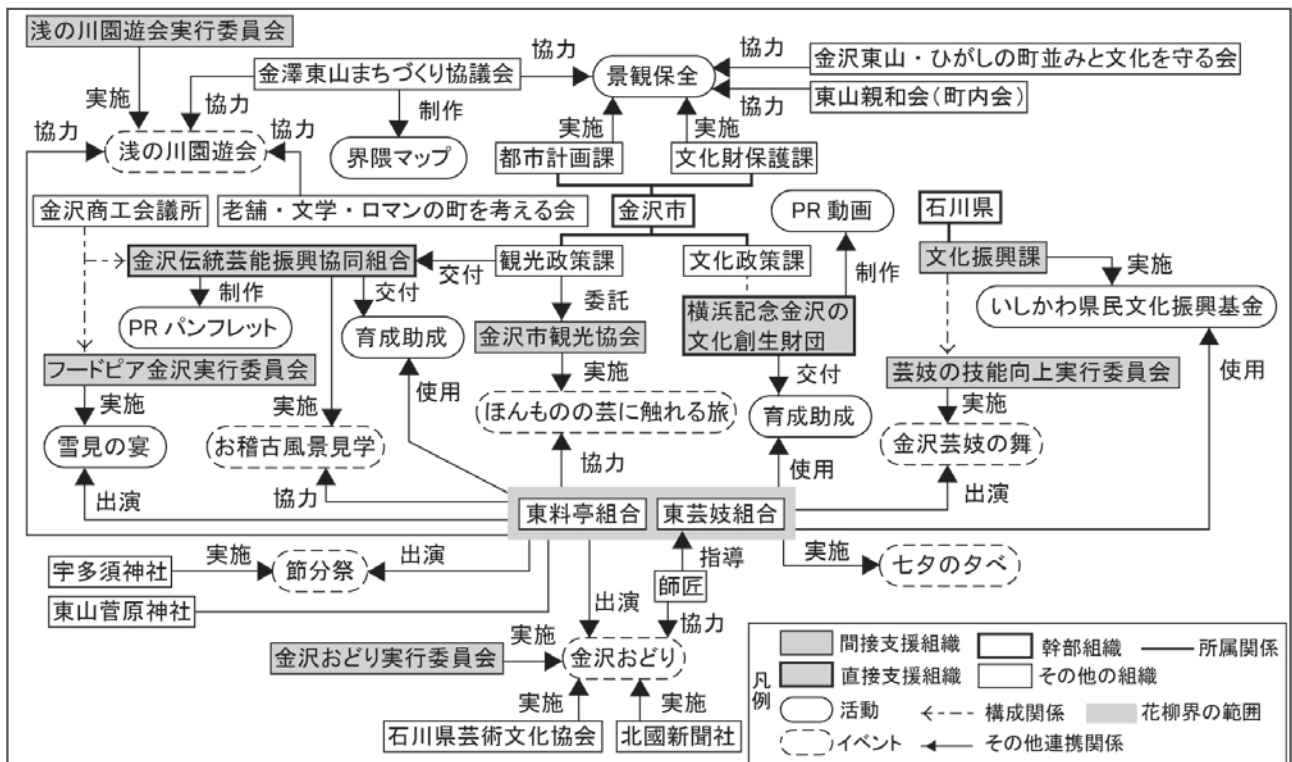
芸妓13名、お茶屋7軒が営業している。芸妓は、東芸妓組合に所属し、お茶屋の経営者が東料亭組合に加盟している。



ひがし（金沢市）の町並み

ひがし（金沢市）の概要

茶屋数 [軒]	7	芸妓数 [名]	13
花柳界組織	東芸妓組合 東料亭組合		
支援組織	金沢東山・ひがしの町並みと文化を守る会		
中心となる構成員	住民（お茶屋経営者を含む）		
支援内容	景観整備、商品用途管理		



ひがし（金沢市）の連携状況

2) 支援組織の概要と活動

2001年に地域住民の東山ひがし地区内の商売を営む人々で、「金沢東山・ひがしの町並みと文化を守る会」が設立された。まちづくり協定でハード面では、重要伝統的建造物群保存地区の規制内容をさらに強化させた制度の策定、ソフト面では「販売物は金沢にゆかりのあるもの」と定められている。

また、ひがし茶屋街近くの宇多須神社も関わり、境内では、節分祭りが行われる際に、芸者衆による豆まき、踊りの奉納などが行われる。

4.3.3 にし（金沢市）

1) 花柳界組織の構成及び活動

芸妓19名、お茶屋5軒が営業を行っている。芸妓組合、料亭組合はひがし茶屋街同様の構成である。

2) 支援組織の概要と活動

地域住民らによる「にし茶屋街を愛する会」が2002年に組織され、景観整備や観光客対応を行っている。今回の調査では、実際にまちづくり協定を使用して壁面の色をそろえたり、イベントの「ふるまい酒」を開催したりしていることが分かった。



にし（金沢市）の町並み

にし（金沢市）の概要

茶屋数 [軒]	5	芸妓数 [名]	19
花柳界組織	西芸妓組合 西料亭組合		
支援組織	にし茶屋街を愛する会		
中心となる構成員	住民		
設立年	2002年		
支援内容	情報発信、景観整備		

4.3.4 主計町（金沢市）

1) 花柳界組織の構成及び活動

芸妓10名、お茶屋4軒が営業を行っている。芸妓組合、料亭組合はひがし茶屋街同様の構成である。

2) 支援組織の概要と活動

三茶屋街の共通の支援以外に組織はない。



主計町（金沢市）の町並み

主計町（金沢市）の概要

茶屋数 [軒]	4	芸妓数 [名]	10
花柳界組織	主計町芸妓組合 主計町料亭組合		

4.4 浜町（福井市）

1) 花柳界組織の構成及び活動

芸妓4名が福井・浜町芸妓組合に、料亭7軒が福井料理組合に所属する花街であることが分かった。芸妓は置屋「ねをや」に所属する。週末のみお稽古に参加する週末芸妓部制度があり、現在学生1名が1期生として所属している。

芸妓募集を組合HPのみならず、企業ガイダンスでも行い、多くの学生にお座敷仕事の魅力を伝えている。

芸妓は料亭以外にも、近年浜町で増加傾向にある芸妓の踊れる場所がある一般飲食店やホテル、芦原温泉にも派遣される。しかし、料亭以外の場所に行く場合の方が、支払う料金が高く、組合に加盟する料亭に行く場合「玄人行き」、それ以外の場合は「素人行き」と呼ばれる。

2) 支援組織とその活動

福井芸妓の技芸向上や後継者の育成を目的として商工会議所が中心となり、1990年2月に「福井芸妓伝統育成会」が設立されたことが分かった。育成会は19社、33名の会員により構成さ

れ、設立当初の出資金により運営されているため、現在会費はない。支援内容は、これまで芸能修得や若手後継者育成の奨励金の支給も行ってきたが、現在は主に、舞台の開催に力を入れている。舞台「温習会」は、芸妓の舞踊のお稽古成果を披露する場として、2017年に約30年ぶりに復活させ、以来毎年行われている。また、2017年には小さい花街同士で連携をとるため、浜町以外の芸妓も出演する「福井・浜町 花あかり」を開催した。



料亭 開花亭（福井市浜町）

浜町（福井市）の概要

料亭数〔軒〕	7	芸妓数〔名〕	4
花柳界組織	福井・浜町芸妓組合 福井料理組合		
支援組織	福井芸妓伝統育成会		
中心となる構成員	商工会議所		
支援内容	育成、イベント開催		

4.5 小浜（小浜市）

1) 花柳界組織の構成及び活動

芸妓1名と料亭1軒が営業を行い、花柳界組織はない。料亭は、お昼のお座敷遊び体験の実施や、インバウンド向けの英語HPの作成など様々な活動に取り組んでいる。

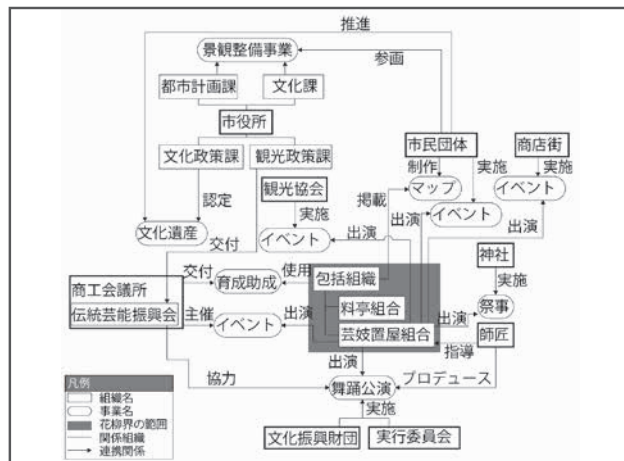
2) 支援組織とその活動

支援組織は、特にない。

5. 成果と今後の活動

5.1 事業成果

調査を踏まえ、花街の組織の連携状況と継承活動を体系化すると、未完成であるが図のような花街を中心としたモデル図が考えられる。



モデル図

商工会議所が中心となり構成される伝統芸能振興会や市が、育成助成を交付し花街の継承に深く関わる。また、実行委員会が、花街に代わって舞踊公演を実施することにより毎年継続して講演を開催することができる。舞踊公演のプロデュースや芸妓への指導を行うお師匠さんは花街継承には欠かせない。商店街、市民団体、市、伝統芸能振興会は、花街振興、観光資源等として、芸妓の出演するイベントを行う。さらに、芸妓は神社が開催する伝統的なお祭りにも出演することも多い。市や市民団体が、花街や芸妓を文化遺産としての登録、また無電柱化や石畳整備など花街の景観整備を行う。以上のように、花街と経済界、行政、住民等の多く組織が連携することにより、花街の継承につながると考えられる。

5.2 今後の活動

昨今のコロナ禍により、花街は大きな影響を受けた。例えば、金沢では市が「芸妓文化継承緊急奨励事業費」として、芸妓1人あたり24万円の奨励金を支給し、芸妓文化を継承していく動きがみられた。このように、支援体制があると、緊急時にも対応することができるのではないかと考えられる。今後も、北陸地域のみならず全国の花街を対象として、関連する組織の調査を引き続き行う予定である。

最後に、調査・分析に参加した田中裕利子氏、そしてヒアリングにご協力頂いた皆様に謝意を表します。

会員だより

「令和2年春の叙勲」で、栄えある勲章を3名の会員の方が受章されました。長年のご功績が顕彰されたものであり、心よりお慶び申し上げます。

瑞宝小綬章



辻 英夫氏
(東京都世田谷区在住)
元北陸地方整備局
企画部長

瑞宝小綬章



平田 五男氏
(新潟県新潟市在住)
元北陸地方整備局
建政部長

瑞宝双光章



藏坪 洋介氏
(岐阜県高山市在住)
元北陸地方整備局
用地部用地調整官

北陸のチャレンジ精神で改革推進

辻 英夫

令和2年春の叙勲において、瑞宝章を受章いたしました。これもひとえに、多くの皆様方から賜ったご支援、ご鞭撻のおかげと心から感謝いたしております。

新型コロナウイルスのため国土交通大臣から勲章の伝達、皇居における天皇陛下の拝謁等は残念ながらすべて中止となりました。しかし、周りの多くの方々からは、このような時期に明るい知らせを聞けて良かったと言われ、受章の実感がわいてきています。

思えば、昭和50年に建設省に入省して即日、熊本県に出向して以来、27年間の役人生活で、人事院、本省、阪神国道事務所、外務省、本州四国連絡橋公団、本省、フィリピン国 JICA 専門家、九州地方建設局、大分工事事務所、(社)国際建設技術協会、国土庁、山口県、北陸地方建設局・整備局と本当に幅広い経験をさせていただきました。それぞれの職場で、上司、同僚等に恵まれ、楽しく仕事をさせていただきましたが、特に、北陸は思いで深いものがあります。経歴でもお示した通り、北陸は全く初めての職場でしたが、何でも新しいことに積極的に取り組むチャレンジ精神があり、また、自然豊か

でゴルフ場やスキー場も近くにあり、仕事や遊びに楽しい時を過ごすことができました。退職後も家族で毎年、スキーや観光に訪れています。

着任の直前に上宝村で大きな雪崩事故があった、局はバタバタしている中での赴任ではありませんが、翌年1月に予定していた省庁再編に伴う地方建設局と港湾建設局の統合準備を進めなければならない状況でした。東京では月に2回くらい全国の企画部長が集まって会議をしていました。統合準備だけでなく、入札制度改革が行われようとしており、全国初のデザインビルドで白岩砂防堰堤工事が始まっていて、進めるにつれて課題が明らかになるとともに、今は当たり前になった総合評価方式を全国的に導入することになり、みんなと知恵を絞った思い出があります。設計業務においても、プロポーザル方式を導入することになりましたが、手間がかかるのでなかなか導入が進まない事務所に苦労しました。検査制度、IT化、防災の充実等今につながる改革がちょうど始まっていたともいえると思います。

また、北陸の全国での位置付けを高めようと、日本地図を逆さにした地図を名刺の裏に印刷して配っていました。当時の扇建設大臣が来局した際に、白波瀬局長がPPT上の日本地図に「扇」を開いた図を重ねて、北陸は「扇」のかなめに

あたると説明して、扇大臣が大変感激されたのが思い出深いです。地方整備局になってからは当時の横塚局長の発案で、旧運輸と旧建設の融合を図ることを目的に道を隔てて立っていた両庁舎を結ぶ連絡橋を突貫工事で作ったりもしました。点字による事業概要、写真入り座席表の表示等全国初のちょっとした新しい取り組みも実施することができました。これらはすべて良い思い出になっており、整備局の皆さんの支援があつてのことと大変感謝しています。

現在、途上国の発展にかかわる仕事を主に働いております。世の中に貢献できるうちは健康

に気を付けながら、なかなかうまくならないゴルフや英会話の勉強も合わせてもう少し頑張っていきたいと思っております。



ブラジルのリオデジャネイロ州交通局長より「リオデジャネイロ都市圏におけるITSマスタープラン策定調査」(JICAプロジェクト)で感謝状を贈呈された(2016)

よき地域とよき人々に支えられて

平田 五男

令和2年春の叙勲で瑞宝小綬章を受章することができました。これもひとえに諸先輩の方々をはじめ多くの方々のご指導、ご鞭撻のおかげと心から感謝を申し上げます。

これまでを振り返ってみますと、自然豊かで住みやすい北陸地方で勤務でき、約40年間を全うできたことに感謝しております。

昭和43年で熊本県内の普通高校を卒業し、名古屋市周辺で民間会社や公務員として働きながら昭和48年に夜学で土木科を卒業し、その年に中部地建高山国道に採用され建設の仕事に就くことができました。

この時代は、昭和47年に日本列島改造論が提唱され、開発が遅れていた地方、特に日本海側にとっては大きな期待が持たれていたと記憶していて、土木を選んだことと建設省に採用されたことが幸運であったと感慨深く思っているところです。

昭和49年に北陸地建新潟国道に配転されて以来、今日まで北陸での居住、勤務となりました。北陸では、昭和49年新潟国道、52年金沢、60年富山、62年羽越、平成12年長岡、平成17年北枝の各事務所勤務や数度の本局勤務、また、平成10年から本省防災課災害査定官など心に残る多種多様な仕事に携われたと思っています。

新潟では本局在任中、S56年の豪雪、H7年に

は関川・姫川水害、H9年12月姫川上流土石流災害、H16年7月豪雨災害、同年10月中越地震、H19年中越沖地震など多くの災害が発生しました。当時は、北陸地方は災害が最も多いと感じるほど多発したと思っていました。56豪雪は本局道路管理課在任中でしたが、年末に降り始めた雪は、降雪量の多大さと、仕事納めを控えた多くの交通量のため、各所で交通渋滞を起し除雪の遅れをきたし更なる渋滞となる悪循環となったと記憶しています。九州出身で雪はたまに降る程度で、降るのを待ち遠しく思っていた私には驚きの降雪量であったが、多くの除雪機械の整備と熟練した施工業者のオペレータの大切さを感じました。昭和38年の「38豪雪」の経験からドカ雪にも対応できる除雪機械の整備や除雪体制の整備が進められていたが、それでも混乱するほどの豪雪であったと記憶しています。また、豪雪後の春には雪解けが進むなか、雨量が少なくても地滑りや土砂崩れが発生する所謂、融雪災害も発生し、雨量と融雪水量で災害として採択されるようになったと記憶しています。

H7年の関川・姫川水害は、下流の直轄管理区間では破堤被害があり、水田等で冠水被害があったが限定的な範囲で治まったが、情報が無かった直轄管理区間外の上流域での道路、JR、護岸などの多くの施設が被災していて、後日現場を見て災害の怖さを感じました。中越地震の災害対応では、山古志村で発生した天然ダムの

決壊を避けるべく排水するための排水ポンプが全国からの支援を受け、危機が回避されたのが思いだされます。

いろいろな災害対応において、広域的な支援体制は重要不可欠であり、近年、全国で多発している災害の状況をみても必要不可欠のものとの思いを強く感じているところです。

本省防災課災害査定官では、全国各地の被害状況を確認し復旧費用の査定の業務でした。H10年の栃木福島豪雨では、1,000ミリ以上の連続雨量で多くの人的、物的、公共施設の膨大な

被害が発生しました。当日、現地調査に入り、土石流による人的被害の発生した現場で悲惨さを感じさせられました。

振り返ってみると、災害に関連したようなことが多く記憶に残っているように感じております。

良き先輩方、同僚、後輩の皆様のご指導・ご協力により思い出多い充実した経験をさせていただきました。改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

多くの出会いに感謝

藏坪 洋介

令和2年春の叙勲において受章することとなりました。これもひとえに、諸先輩を始め多くの皆様方のご指導の賜ものと心より感謝申し上げます。予定の伝達式及び天皇陛下への拝謁については中止となり、後日に勲章・勲記の伝達を受ける運びとなっております。

思い起こせば、昭和43年に親元を離れ、新潟駅前にあった共済組合の施設に宿泊し、白山浦の本局大会議室で、公務員としての誓約書を提出して始まった公務員生活39年間、多くの人との出会いで、心身共に育てていただいたと、只々感謝の言葉しかございません。

新任地の湯沢砂防工事々務所では、事務所長様をはじめ職員の皆様と家族の付合いをさせていただきました。寮生活では、職員の寮母さんと寮生の諸先輩方に、公私にわたり育てていただきました。この湯沢町での5年間は、先輩の方々のご指導により、職務に対する公務員としての心構えの修練期間であり、ここでの体験が、その後の勤務の大きな支えとなりました。

次の任務地の富山工事々務所から始まる12回の転勤を重ねた34年間は、一貫して用地業務に携わりました。

用地業務は、地権者や地元役員の方々とコミュニケーションを通して職務を遂行していくのですが、その前段では、事業担当課との調整が重要ですし、関係市町村の担当課との関わりもあります。業務の遂行過程では、課題解決の

ための所内調整、更に上局との調整を始め、関係権利者においても実質的な権限者との調整が必要になります。これらの折衝では、その課題に対するコミュニケーションを通じ、相手方の人柄に接することになります。これらの体験で多くを学び、成長させて戴いたと思います。

特に思い出されるのが、用地業務を始めて3年目だったと思います。担当箇所の用地交渉が難航し、何とか解決の糸口を掴みたいとの思いで、地元役員のところは何回も出向いて折衝していた時に、「結婚をしていない無責任な人間は信用できない。」旨を言われました。経験を重ね『相手の信頼』が用地交渉の心構えで重要だと体得するのですが、当時は「説得の話術」を懸命に学ぶ世間知らずの若輩者でした。

その後に関川改修、梯川改修、小松バイパスの大規模事業の新規着手段階を担当した時には、関係市役所の担当者と同行をお願いし、地元関係者への説明会や地権者宅で用地交渉を行うことを常としていました。ほとんどが生活に直結する事業であり、また、生活の場を移転しなければならぬ地権者の事情との調整でしたが、これらが用地交渉の成否に繋がるものであり、関係機関との調整も多く、その度にご指導を賜りました。

振り返れば、間違いなく用地業務を通じ多くの出会いと、そこでのご指導により、今日を迎えることができました。これまでに出会った皆様様に、改めて深く感謝を申し上げます。

どうもありがとうございました。

「地域づくり in ほくりく」の表紙募集

「表紙が変わった！」と気づきましたか？

今号は、会員の和田日朗さんにご寄稿いただきました。湿原をわたる風が感じられる爽やかな写真(絵)を拝見し、今春は緊急事態宣言による外出、移動の制限要請があったので、久しぶりに心身が軽やかになったような気がしました。

和田さんは新潟市美術展(写真部門)で美術協会長賞を受賞され、これまで「雪の音」(建設コンサルタンツ協会発行)などの表紙を飾られています。

会報の表紙は、北陸建設弘済会時代を含めると、武川武彦さん、田原忠男さん、土田和男さんの絵で飾ってきました。



『初夏の鹿島檜』
(2009 夏号) 武川 武彦さん



『常西公園小水力発電所』
(2013 夏号) 田原 忠男さん

土田さんには、2014年夏号から、2020年新春号まで担当いただきました。いただいた作品は18点。中でも、ダムシリーズは圧巻です。

ダム現場を熟知され、大町ダムの完成を見届けた土田さんに、自分たちの造ったダムを描いてほしいという声があり、大石ダムを皮切りに5つのダムが表紙に登場しました。

6年間、ありがとうございました。



『大石ダム』(2017 夏号) / 『大町ダム』(2018 新春号)
土田 和男さん

今後は、北陸地方整備局(北陸地方建設局)、北陸地域づくり協会にゆかりのある方々の作品を掲載したいと考えています。絵画に限らず、版画、写真、刺繍などジャンルは問いません。自薦他薦問わず、北陸の素晴らしさを表現した作品を募集致します。協会までご連絡ください。

編集後記

新型コロナウイルス感染症収束の兆しは未だ見えない。感染拡大を防ぐための三密回避、手洗い、マスク着用が「新しい生活様式」として定着し、「テレワーク」、「オンライン授業」、「オンライン飲み会」など働き方、学び方、日常生活のデジタル化が一気に進んでいる。

「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査」(内閣府 R2.6.21)によると、年代別では20歳代、地域別では東京都23区に住む人の35.4%が、地方移住への関心が高まっている。

当協会の「北陸地域の活性化」に関する研究助成事業でも、近年、大学生が地元住民と地域の課題解決に取り組む研究活動の応募が増えている。今号で紹介した金山里山の会は、富山県立大学の学生が射水市のアイデアコンテストで提案した事業を実践するなど、地域と大学が一体になった地域づくりが進んでいる。

新型コロナの影響で観光、特にインバウンドの激減で観光地域づくりは大打撃を受けている。

「2020年の訪日旅行者数目標4000万人」など、これまでは数が前面に出ているように感じられることもあった

が、今後は今まで以上に質の高い観光が求められる。その時に備え、地域資源を再確認し、地域独自の魅力を磨き、力を蓄える時期と覚悟を決めるしかない。

雪国には冬になると家に籠もり、本を讀んで考えたり、手仕事をしたり、春におけるの畑仕事の準備をしながら春を待つ「冬ごもり」がという風土があった。自然と折り合い暮らす中で新しい技術を開発し、文化を織りなし、受け継いできた。

地域づくりに関心のある学生、移住を考える若者を引き込み、新しい観光、地域の在り方を地域の人々と一緒に描きつくっていくことで、これまで以上に地方の深い魅力を創出し、発信できるだろう。(事務局)

地域づくり in ほくりく 第22号

発行 令和2年7月14日
編集 一般社団法人 北陸地域づくり協会
〒950-0197
新潟市江南区亀田工業団地二丁目3番4号
電話 (025) 381-1160
FAX (025) 383-1205
HP: <http://www2.hokurikutei.or.jp>